新約聖書 ルカによる福音書 12章 32節—40節 (新共同訳)

³² 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。³³ 自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。³⁴ あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」
³⁵ 「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。³⁶ 主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。³⁷ 主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくと、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。³⁸ 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。³⁹ このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。⁴⁰ あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「思いがけない時」

ヴィクトル・ユーゴー作の「レ・ミゼラブル」という有名な物語があります。日本では「ああ無情」という題で知られています。

物語の主人公のジャン・ヴァルジャンは、姉の子供たちのために一斤のパンを盗んだ罪で19年間も刑務所に入っていました。服役から釈放されたのち、行く先々で冷たくあしらわれ、キリスト教の司教のもとに訪れたジャン・ヴァルジャンを司教は温かく迎え入れます。しかし、その夜、司教が大切にしていた銀食器をジャン・ヴァルジャンは盗んでしまいます。それは、自分を唯一温かく迎え入れてくれた司教を裏切る行為でした。しかし司教は、翌朝、彼を捕らえた憲兵に「食器は私が与えた」と言い、彼を放免させた上に、残りの二本の銀の燭台も彼に差し出します。人間不信と憎悪の塊だったジャン・ヴァルジャンは、司教の愛と信念によって改心しました。

私が子供の頃に読んだこの物語の中で、最も印象に残っている部分があります。それは、のちに事業で成功を収め、街の市長にまでなったジャン・ヴァルジャンが、社会の底辺に置かれた人々を助けることをいつも忘れず、散歩に出かける時は道端の貧しい人々に施しをするためにポケットにお金をたくさん入れていき、散歩から帰った時はいつもポケットの中は空になっていたという箇所でした。

この物語の根底に脈々と流れているものは、キリストの福音だと思います。自分の銀食器を盗んだジャン・バルジャンを無実にし、残りの銀の燭台も差し出した司教の行いからはイエス・キリストの「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(マタイ 5:39、ルカ 6:29)という言葉や「だれ

の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」（ヨハネ 20:23）という言葉が思い起こされます。

また、お金をたくさん入れたポケットがいつも空になるほど貧しい人々に施しをしたジャン・ヴァルジャンの行いからは、本日の福音書の「尽きることのない富を天に積みなさい」というイエス・キリストの教えが思い起こされます（ルカ 12:33）。

天に富を積むために、自分の持ち物を売り払って施しをせよとイエスは言います。これは、自分のために富を積むことが地上に富を積むことであるのに対し、神の前に豊かになることは他者への施しを通して天に富を積むことであると意味しています。

「そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない」と言われ、天に積んだ富は、虫に食い荒らされることがないというたとえがここで語られます。古代において、虫に食い荒らされかねない衣服は高価であり富の象徴であったからでしょう。

さらにイエスは「あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」と言います（ルカ 12:34）。自分にとっての「富」のありかは、自分の心が最も大切にしているものを明らかにします。天に富を持つ人はその心も天にあり、地上に富を持つ人はその心も地上にあります。

この聖書箇所では、この世で自分のための富を所有しようと思いつくのではなく、真に価値あるもの、神を喜ばせる生き方を見出すようにと求められています。それが神の国を求める生き方なのです。

この地上で富を独占したいという欲望を捨て、他者に施しをすることへの要求に続いて、イエスは新たなテーマについて語り始めます。「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい」と（ルカ 12:35）。これは、私たちが僕（しもべ）の立場に立って常に準備を整えておくようにということです。「ともし火をともし」とは、外出先から帰ってくる主人を出迎える準備であり、夜に行動するための準備と考えられます。

それは、婚宴に出かけて行った主人の帰宅が遅れ、夜中に戸を叩いても、すぐに戸を開けて主人を出迎えることができるよう常に待ち受けている僕（しもべ）としての準備です。

そして、主人が帰ってきた時、居眠りをしておらず目を覚まして主人を出迎えることができた僕たちの幸いが語られます（ルカ 12:38）。

「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても」と言うように、主人の帰宅が予想外に遅くなっても、その帰りを常に待ち受けている姿を主人から認められる僕は幸いだということです（ルカ 12:38）。ここでは、忍耐強く待ち続けることの大切さが強調されています。

そのような僕の姿を認めた主人は、僕たちを食事の席に着かせ、今度は主人が帯を締めて僕の立場に立ち、僕たちに給仕をしてくれるということです。

僕たちに対して主人が給仕するだろうとの約束は、僕と主人の役割の劇的な逆転を伴います。主人に仕えていた僕たちは、今度は主人が自分たちに仕えてくれることに気づくでしょう。

このたとえで語られているのは、主人が帰ってくるのを眠らずに待ち望む僕は、み国の到来、イエス・キリストの再臨、イエス・キリストが天から再び来られるときを待ち望む者の姿だということです。

居眠りをせずに忍耐強く主人の帰りを待っていた僕たちに、食事の席に着くようにと言う主人の指示は、イエス・キリストの再臨の喜びに満ちた素晴らしい宴（うたげ）の時を暗示しています。

主人の帰りを待つとは、何もせずにただ待っていればよいということではありません。私たちは、キリストの福音を実践する生き方と、心のあり方と共に、キリストの再臨の時を待ち続けることが大切なのだと思います。

先ほどお話しした「レ・ミゼラブル —— ああ無情」の物語の中で、自分の銀食器を盗むという裏切り行為をしたジャン・ヴァルジャンを赦し、残りの二本の銀の燭台も彼に差し出した司教や、いつも自分のポケットの中が空になるまで貧しい人々に施しをしたジャン・ヴァルジャンと全く同じ行いをすることは難しいかもしれません。

それでも、人を赦すべき場面や、困窮し助けを求める人々を目の当たりにした時、この司教やジャン・ヴァルジャンの行いを思い出し意識するだけで、キリストの福音に基づいた心の持ち方をし、キリストの福音に沿った行いをするに近付いていけるのではないのでしょうか。

私たち人間の心の中には、どんな時にも消えることのない希望のともし火があります。その希望のともし火を絶やすことなく心にともし続けながら、キリストの福音と共に、キリストの到来を待ち望みましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。私たちが、あなたの心を心とし、天に富を積み、あなたの時を待ち続けることができるようにしてください。地上で困窮している人に、あなたの愛によって生きる希望と喜びをお与えください。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 創世記 15 章 1 節—6 節（新共同訳）

¹これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」²アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるのでしょうか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」³アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださりませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」⁴見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」⁵主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」⁶アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

新約聖書 ヘブライ人への手紙 11 章 1 節—3 節と 8 節—16 節（新共同訳）

¹信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。²昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

³信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。

⁸信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。⁹信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。¹⁰アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。¹¹信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなさった方は真実な方であると、信じていたからです。¹²それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。

¹³この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。¹⁴このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。¹⁵もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれませんが。¹⁶ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさしません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。

教会讃美歌 357 番「主なる神を」、375 番「神の息よ」、394 番「主よ終わりまで」。